

No. 174 (2023/4)

The Andy Warhol Found. for Visual Arts v. Goldsmith

～変容的利用法理の『拡大』に歯止めがかかる?!～

弁護士 石新智規

目次

1	事案の概要.....	1
2	第2巡回区控訴裁判所判決.....	3
	(1) 原審のサマリージャッジメントを破棄.....	3
3	第2巡回区控訴裁判所判決の修正.....	5
	(1) Google v. Oracle 判決に基づく再審理（および全員審理）申立て.....	5
	(2) 判決内容の修正（結論は維持）.....	7
4	最高裁の上告受理.....	7
5	最高裁における口頭弁論.....	8
	(1) ウォーホル財団代理人.....	8
	(2) ゴールドスミス代理人.....	11
	(3) 合衆国政府代理人.....	13
6	本判決の意義と予想される最高裁の判断.....	14
	(1) 変容的利用法理の拡大とその傾向に対する批判.....	14
	(2) 待たれる最高裁判決.....	15

1 事案の概要

本件^{1,2,3}は、著名人の肖像撮影で著名な写真家リン・ゴールドスミス (Lynn Goldsmith、以下「ゴールドスミス」という。) ⁴の写真に基づき制作された、ポップアートの巨匠で特に著名人をシルクスクリーン技法で描くことで知られるアンディ・ウォーホル (Andy Warhol) (以下「ウォーホル」という。) の肖像画の無断ライセンスがゴールドスミスの写真の著作権を侵害しているか否かをめぐり訴訟に発展した事案である。

ニューヨーク南部連邦地方裁判所は著作権侵害を否定したが、第 2 巡回区控訴裁判所は一転して著作権侵害を肯定した。現在、本事件は連邦最高裁に係属している。以下、事案の概要である。

1981 年 12 月 3 日にニューズウィーク誌の依頼で、ゴールドスミスは、彼女のスタジオでミュージシャン、ロジャー・ネルソン・プリンス (Prince Roger Nelson) (以下一般に知られている呼び名である「プリンス」という。) の写真を撮影した。ゴールドスミスは、写真撮影にあたり彼の輪郭がくっきりと浮彫りになるように照明を定めた。さらに、アイシャドーやリップグロスでメイキャップもし、被写体であるプリンスとの信頼関係を構築しながら、撮影にあたり彼の官能的なところを際立たせた。プリンスの表情の撮影に最も適していると判断したニコン製 35 ミリのカメラ、85×105 ミリのレンズを用い、ゴールドスミスは彼の白黒の写真撮影した。

ゴールドスミスによれば、この日のプリンスは神経質で落ち着かず、撮影が始まってすぐに控室に下がってしまい、ゴールドスミスにそれ以上の写真を撮影させなかった。

撮影に成功したのは、わずか 23 枚 (12 枚の白黒写真と 11 枚のカラー写真) であった。これらの写真の著作権はゴールドスミスが保有している。

全 17 ページ。サンプルにつき、以下省略

¹ The Andy Warhol Found. for Visual Arts v. Goldsmith, 992 F.3d 99 (2d Cir. 2021).

² 本事件及び本判決を紹介するものとして、桑野雄一郎「アンディ・ウォーホル美術財団 vs ゴールドスミス事件連邦控訴審判決 現代美術と著作権～金魚公衆電話ボックス事件判決も踏まえて」(コピライト No. 727 vol. 61, 48 頁)。

³ 2022 年年 10 月 21 日 SOFTIC 判例ゼミ 第 4 回の報告者土方恭子氏及び重村瑞唯氏の作成されたパワーポイント資料 (https://www.softic.or.jp/semi/2022/4_221021/resume.pdf) 及びその参考文献も参照。

⁴ ゴールドスミスのプロフィールと彼女の仕事を紹介するものとして、<https://www.nyc-arts.org/showclips/photographer-lynn-goldsmith-i-nyc-arts-profile/>を参照。